安成通信　2017/10/16　宮崎県椎葉村を訪ねて　―「秘境」の未来可能性

宮崎県の高千穂・椎葉山地域が国連農業機関（FAO）認定の世界農業遺産に 2015 年に指定されたことを記念して、2 月の高千穂町に引き続き、今回は椎葉村と地球研の共催で椎葉村シンポジウム「“つながり”を未来につなぐ―世界農業遺産　変えてはならないものと、かえなくてはならないもの」を 10 月 12 日現地で開催しました。

平家伝説と稗つき節で有名な奥深い椎葉村は、私にとっても長いあいだの“憧れ”の里でした。シンポジウムの前日、熊本空港から車で南阿蘇を経て九州中央山地の山越えをして 2 時間半走り、椎葉村中心部の上椎葉地区に着きました。まずの印象は「山深い！」でした。宮崎市や延岡市、日向市など宮崎県の主要都市からもほぼ同じ程度の時間がかかるようです。鬱蒼とした照葉樹の山々に囲まれた耳川沿いの深い谷間に、寄り添うように 300 戸程度の家々が並んでいます。私に用意された宿は平家伝説の舞台となった場所で旧家屋（国指定重要文化財）を維持している鶴富屋敷旅館でした。

隣に村営の椎葉民俗芸能博物館があり、さっそく訪ねました。４つの展示室では、椎葉村の自然に始まり、椎葉を代表する焼畑農業、神楽、民謡などの伝統芸能などが、実物展示や資料に加え、映像、音声も用いて詳しくかつ丁寧に紹介されています。正調稗つき節や３D 画像の椎葉神楽などもじっくり楽しむことができました。

シンポジウムではまず、田中克氏（京大名誉教授）が「21 世紀を生きる思想―森里海連環と焼畑」と題した基調講演をされました。これまで森里海の連環は、海辺に近い森と海の関係が強調されていましたが、田中氏は椎葉のような山奥の焼畑も川を通して森里川海としてつながっており、自然資本経済の一環として「海を想う焼畑農業」の思想の重要性を強調されました。この点について椎葉での焼畑農業を長年指導されてきた方からも賛同の声が聞かれたのは驚きでした。

続いて井上果子氏（宮崎大講師）が「社会変容と神楽の継承」と題して講演をされました。高千穂・椎葉山の世界農業遺産の地域は、1980 年頃から現在まで人口が 4 万人から 2.5 万人に（椎葉村でも、5 千人から 2.7 千人に）減少しているにも関わらず、95 の神楽舞の団体の数はほとんど減少しておらず、参加者は平均で 25 年程度の経験を有していることを報告されました。特に近年は、子供たちに神楽を教えることが広がっており、神楽が地域ぐるみで子どもたちを育てつつ、伝統の継承と世代間連携の大切な場になっていることを指摘されました。

井上さんの後、久山喜久雄氏（フィールドソサエティ代表）の紹介で、二人の地元小学生により、子供焼畑体験学習が元気に報告されました。子供たちにとって、神楽も焼畑も、人と自然のつながりや、自然への畏敬の念を学ぶ大切な機会になっています。最後に、椎葉村で活躍されている比較的若い世代の 3 人（椎葉智成さん、椎葉昌史さん、青木優花さん）に先の井上果子さんが加わったパネル討論が、阿部健一教授（地球研）と藤掛一郎教授（宮崎大）の司会で行われました。二人の椎葉さんはいわゆる U ターン組、青木さんは I ターンにあたりますが、それぞれにとっての椎葉の良さとこれからの夢や展望を語って下さり、人と自然がつながった椎葉での暮らしのすばらしさを垣間見ることができました。

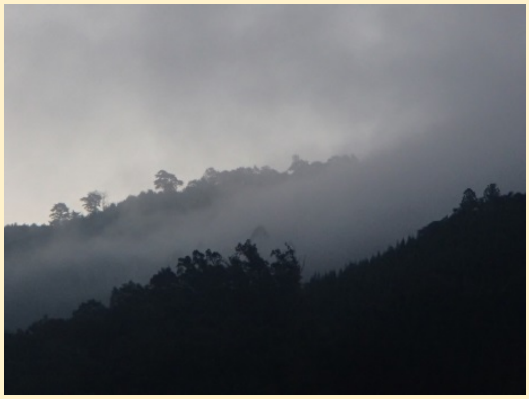
一方、地域の人口減少（都会への流出）が続くなかで、焼畑農業を含む椎葉の社会を、未来に向けてどのように持続可能なかたちにできるかは、非常に大きな課題であることを、討論参加者全員が共通の認識として持っておられました。シンポジウム後に、黒木副村長、甲斐教育長はじめ、村役場や宮崎県庁の職員の方々も多く参加されて福富屋敷で懇親会が開かれましたが、この問題はその場でも活発に議論されていました。

学業や就職のため地域から都会に出ていった若い人たちを、如何に地域に戻ってもらうようにできるか。これは持続可能な地域社会のために不可欠です。そのための「半農半 X」というアイデアも出されました。焼畑農業をやりながら、椎葉の地の利や自然の恵みを生かした、あるいは都市域とつなぐ多様な仕事 X を作り出すという案ですが、私はとても共感を覚えました。屋敷の囲炉裏端で続いた二次会でも、焼酎を酌み交わしながら夜遅くまで議論が続きました。

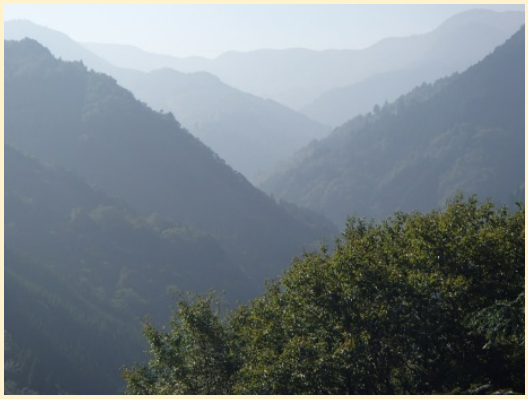
都市 vs 農村（農山漁村）の問題は、椎葉だけでなく、日本全体の「地方」が抱える共通でかつ深刻な問題です。かつて椎葉村を訪れて詳しい調査を行った民俗学者柳田國男も昭和 4 年の著書『都市と農村』で、すでにこの問題を指摘していますが、1 世紀近く経た今、この問題は解決どころか更に深刻化しています。国や地域に留まらず、資源・エネルギー問題や環境負荷の問題も絡み、地球規模での問題ともなっています。政府が出している「地方創生」策だけではとても解決できない、より根本的な問題を、この問題は内包しています。

森里川海連環という自然と自然のつながり、農業や漁業という自然と人のつながり、そして都市と地方（農山漁村）の人と人、物と物のつながりを、調和的に連結していける新たな価値と社会・経済の創出なしには、おそらくこの問題は解決しません。そのためには、研究者も社会を担う様々な人たちとの協働をさらに進めていかねばならない。そんなことを感じながら、「秘境」椎葉をあとにしました。

＜秋深し椎葉のひとの志は高く＞　哲風



山からの霧が晴れつつある椎葉村の朝。（2017 年 10 月 12 日安成撮影）



山深い椎葉村の渓谷。上椎葉ダム付近から撮影。（2017 年 10 月 12 日安成撮影）